



令和8年度 難聴学級 歓送迎会



5月1日(金) 歓送迎会を行いました。昨年度まで4年間難聴学級の担任を務めていた青野先生と、今年度新しく着任した田村先生を迎えるための会です。「いつも笑顔で見守ってくれた青野先生だからこそ、最後は涙で!」と意気込んだ3年生が中心になって進めてくれました。出し物では、Fくんは先生役で登場し、青野先生との思い出を授業形式で語りました。Kくんは、難聴学級テーマ曲、青野先生に贈る曲、田村先生を迎える曲の3曲を作詞作曲してお披露目。Kさんは司会役として、会をスムーズに進行しました。Sくんは青野先生への感謝の言葉、Oさんは田村先生への歓迎の言葉を務め、それぞれ心を込めた言葉をしっかりと伝えました。



生徒たちの成長にジーンとしたり、個性豊かな出し物にくすっと笑みがこぼれたり、終始和やかな雰囲気の中で会が行われました。また、この日は、在校生だけでなく卒業生も駆けつけてくれて、青野先生とのひとときを楽しんでいました。

生徒同士はもちろん、先生と生徒との結びつきが強いことも、難聴学級の大きな魅力のひとつです。これまでの御園中難聴学級が築いてきた温かな伝統や良さを改めて感じる時間となりました。

青野先生へ

先生、お元気でしたか。先生と僕が出会ったのは、放課後の卓球部でした。いつものように練習していた僕に、「難聴学級に入ったらどう?」と声をかけてくれました。これが、僕が難聴生になった瞬間でした。入ってみようかな、でも実は最初はあまり乗り気ではなかったのです。なぜかという、難聴学級で過ごすことに不安があったからです。

そんな僕の不安は、難聴学級に入っ
てすくなくなりました。青野先生の話
はいつも面白くて笑いました。授業中
に机をプロジェクトターにぶつけたら、
角度が曲がると怒っていましたね。

そんな青野先生との思い出の中で
僕が一番嬉しかったのは、毎週水曜日
に僕のためだけに字を書く練習をさ
せてくれたことです。こんなに優しい
先生は他にはいません。先生のおかげ
で今ではだいぶ字が綺麗になりました。
今の僕の一番悲しいことは、この
綺麗な字を青野先生に見てもらえな
いことです。

青野先生ともっと一緒に授業を受
けたかったです。さみしい気持ちは沢
山ありますが、離れていても僕達難聴
生は、大好きな青野先生のことを絶対
に忘れません。僕達にとつての居場所
である難聴学級に出張しに来てくだ
さい。成長した僕達が待っています。
今までありがとうございました。

一年生 S・Y

先生たちの補聴器体験!

先日の生徒総会では、グループごとに話し合いを行いました。その時に、今年度本校に着任した1学年の芝山先生に、補聴器体験をしていただきました。芝山先生は、「補聴器をつけると、自分の班の話を聞こうとしても、近くの班の拍手の音が大きく聞こえてきました。集中しても聞くのが難しかったです。」と話され、普段の聞こえ方との違いに驚かれています。

通常学級の先生方が、補聴器を通した音の聞こえ方を理解することで、授業での配慮や工夫を考えやすくなります。生徒たちにとって聞こえやすい環境づくりのために、こうした機会を日ごろから作っていきたいと思います。

通級の予定

- 【5月】14(木), 15(金),
21(木), 22(金),
28(木), 29(金)
- 【6月】4(木), 5(金),
10(水)グループ
18(木), 19(金),
25(木), 26(金)

日本からアフリカへ 難聴学級の旅✈

大学卒業後、都内の難聴学級に8年間勤めた私は、ご縁があって西アフリカのガーナに派遣されました。幼稚園児から中学生まで250人ほどが通う学校で、その1教室にデフユニット（難聴学級）があり、6人のデフの生徒と2人の先生と共に過ごしました。ガーナの季節は雨期と乾期の2種類。向こうはそろそろ雨期が始まります。大雨が降ると、アスファルトなんてない土の道はすぐに茶色い水たまりだらけに。サンダルに泥が入り込むのも気にしてられません。でも不思議なことに、朝の通勤途中で大雨に降られた記憶はあまりないのです。（そういう時は諦めて、雨が止むのを待って家を出たのかも。）

記憶を辿ると、大雨にみまわれるのはいつもお昼過ぎからでした。生ぬるい風が強く吹き、校庭にそびえ立つマンゴーツリーがわさわさと揺れ、灰色の雲が辺り一面を覆います。トタン屋根に雨粒がぶつかる音がしたら、もう次の瞬間には、屋根の上をドタドタ走り回っているかのような、薄い鉄板に激しい雨の打ち付ける音が教室中に反響するのです。こうなるともう声は届きません。でも私がいるのは難聴学級。手話で伝えれば問題ない！と思ったのも束の間、雨が教室に入らないように、木の窓が閉じられます。電気のない教室は、窓を閉めれば真っ暗に。雨音や雷鳴に驚くのは私だけ。生徒たちはみな（慣れている？それとも聞こえていないから？）落ち着いた様子。「授業できなくなっちゃって…なんだかアレだね」という視線を苦笑いとともに向けると、生徒はただ穏やかな笑みで返してくれました。（芳我）



～言の葉（ことのは）～

私が難聴学級に来てから、ひと月がたちます。難聴生のための「情報保障」をしていると、いかに学校生活の中でたくさんの「言葉」が私たちを取り巻いているかを改めて痛感します。皆さんは学校でいろいろな先生方から様々な話を聞いています。私自身、中学生時代の話すべてが記憶に残っているわけではありませんが、何十年経っても忘れず覚えている話もあります。難聴生にはたくさんの「誰かの言葉」にふれて、「自分の言葉」で自信をもって伝えられる人になってほしいと願っています。そこで、このコラムでは私が見聞きしてきた「言葉」の中から今も心に残り続けているものや「言葉」を通して感じたことなどを少しずつ紹介していきたいと思います。

「中学生の頃の私は、本当の自分をわかってきている人はいないと思ひさみしさを感じていた。あなたの考えは素敵だよ、と言ってもらうことを望んでいた。その後、いろいろな人との出会いや様々な経験から考え方が変わった。

家族に見せる顔、学校での顔、一人でいるときの顔。その顔の奥には違った思いもある。本当はつらいけれど、笑っている時、おもしろいと感じても、つまらなそうにしてみせる時。

どれが本当でどれが嘘ではなく、そのすべてが自分自身。」

これは、私が中学1年生の時に出会った養護の高野真弓先生の言葉です。当時の私も「中学校」というせまい世界の中でもがいていたので、救われたのを覚えています。今でも私の心の糧となっています。自分を大切にできることは他人を大切にすることにつながります。

聞こえ方がクラスの誰かと違う、そんな人がいるのもいいよね！と、難聴生自身も、難聴生と一緒に学校生活を送る皆さんも、すべての人が自分自身を、大切にしてもらえるとうれしいです。

このコラムを通して、皆さんが、私と一緒に少しでも「言の葉(ことのは)」の世界を楽しんでもらえれば幸いです。
(田村)